

【韋編(イヘン)三たび絶つ】

紙がまだ発明されなかった時代の書物は、木の札や竹の札(簡と呼ばれ、これが“書簡”という言葉に残っている)に文字を一行ずつ書き誌し、これを一本一本すだれを編むように革ひもでつなぎ合わせ、これを巻物としました。

これを読む時には広げて読み、読み終わるとくるくると元通りに巻いて保存しました。だから、書物を一巻、二巻と数えたのです。それで今でも、書物の数え方として“巻”という呼び方が残っているのです。

“韋”とは、この札を一本一本つなぎ合わせるための革ひものことです。史記という書物に拠りますと、「孔子は、晩年、易経(易の本で、中国の古典である五経の一つ)を愛読し、余りに頻繁に読んだため、この革ひもが三度も切れたほどであった」とあります。

この事があって以来、今でも書物を好んでよく読むことを“韋編三絶”と呼んでいます。

さて、韋という字の“止”は、止であって“止”の対照形であり足の裏の形(止 = 𠂔)を表わしたものです。ついでに言いますと、足の止はこれで、上の“口”は膝小僧を表わし、膝から下の部分を“足”と言い、“脚”が“あし”全体を表わすのに対しています。英語の leg に対する foot に似ています。

止を逆にした形が𠂔で、韋は逆に向いた足の形で“すれ違い”を

表わした字です。だから、“道”のしるしである“辵”をつけた“違”は、「道をすれ違う」というのが本義の字です。今は単に“違う”というように使われています。

“偉”は、普通の人とは“違う”人、という意味の字で、“えらい人”つまり“偉人”を表わした字です。今は“偉い”というように使われています。

“緯”は、「あっちへ行ったり、こっちへ来たりする“糸”」という意味の字で、織機の“横糸”を表わした字です。織機に張られた縦糸を“経”と言い、この経を一本おきに杼(ひ)に入った横糸がくぐって左右運動をすることにより布が織られていきます。

地球上の位置を示すのに、“経度・緯度”という言葉がありますが、南極と北極を縦に結ぶ線を、“経線”と言い、これと直角に交わる、赤道に平行する横線を“緯線”と言うのは、織機の糸に基いて作られた言葉です。

また、織機は縦糸が基になって織られますので、書物でも重要な人間の拠り所となる古典を“経書”“経典”と呼び、そうでない書物を“緯書”と呼びます。

“衛”の行は、“止”で十字路の形を表わしたものです。だから、“衛”は、道路をあっちへ行ったり、こっちへ来たりして(パトロール)“まもる”ことを表わした字です。警衛”“護衛”というように使われています。